

# 哲學研究

第四百十四號

第三十六卷  
第四冊

サルトルのイマジナションについて

西村嘉彦

—

Image は通常、表象または心像と譯されてゐるが、本來視覺に關係あるものであり、廣意の視覺像が意味せられてゐる。しかし哲學ならびに心理學においては用法がもつと限定せられ、以前に經驗せる知覺の心的反復として心像ないし表象が意味せられ、原知覺像との間には普通單に強度上の差異を置いてゐるやうである。それと同時に心像は視覺的なものに限らず、他の種々の知覺型についても語られてゐる。けれども問題は様々な心像の種類限定や、それら相互の關係につきず、もつと本質的なものとして、知覺と表象、表象と觀念ないし概念との關係として多岐に展開せられて來てゐる。この場合、心的生活に對する全體的展望、また如何なる視點から見るといふ思考態度が根柢に存在し、それらを制御してゐることいふまでもなからう。

心像と感覺ないし知覺との間に量的相違のみを認めようとする立場は Hume から Stumpf にいたる古來の要素心理學の傳統につながるものであり、その必然的結果は精神の中にも感性的要素の保全を認めようとするもので、le principe de conservation が高く評價せられるであらう。しかしこの種の考へ方には重大な缺陷のあることが各方

面から指摘せられて来た。これは概括して二つの側面からなされる、一は心像の感覺痕跡が原知覺の感覺質料となんらの共通點も有たならぬ點であり、他は感覺經驗が思惟によつて利用せられ、心像に變形するとき修正を受けることと點である。これを立證する實驗例は多くの人々によつて數々舉示されてゐるが、これらの指彈は心像が感覺なし知覺と質的な相違をもつてゐることを明瞭に證示してゐると言はねばならぬ。Th. Ribot も、心像が eine Vereinfachung der Sinnesangaben であることと、それがまた eine eigenartige Bereicherung を受けることを強調してゐるが (Die Schöpferkraft der Phantasie, S. 11) 心像の中に働く獨自の作用を abstraction と généralisation と見るか、または dissociation と見るか、微妙な意見の相違はあらうが、心像は知覺の量的延長物でなしとすふ命題を支持するものであることに違ひなし。

しかるに imagination はかかる心像なしし表象を作る能力であり、またこれらの心像を様々な仕方で結合して非實在的な何らかのイメージを産出する能力でもある。ここに、いはゆる再生的想像力と創造的想像力との相違が現れ、一は記憶と、他は意志との類比性が當然思考されるわけである。しかし心像を單に感覺的なものが思惟にまで形成されて行く中途の形成物とのみ考へるならば想像力のもつ獨自性は失はれてしまふであらう。哲學の側から「構想力の論理」といふことが主張され、先知主義の立場からは解決不可能な人間學の諸問題に對する解決が試みられて來てゐるのも確に想像力に對する見方の修正を促してゐるものと考へてよい。もちろん想像力については、問題の性質上哲學と心理學との兩面から精密な検討が加へらるべきであらう。特に現代哲學の一主要學派たる實存哲學に屬する人々がやはりこの方面に獨特な勞作を残して來てゐることはその問題の深さを物語るものである。

フランス實存哲學の代表的存在たる Sartre も初期にやはりこの方面に開拓の歎を入れた一人と言つてよく、從つてその開拓の跡を検討することは「想像力」といふものの本質を明かにするためにも、實存哲學の特色を見るためにも、またサルトル個人の思想および彼の實踐活動の綜合的理解のためにも、きはめて重要なものであると言へよう。

ところで第一に興味を引くのは「想像力」に對するサルトルの研究方法が現象學の方法を襲用してゐることで、これは何よりも、*L'imaginaire, Psychologie phénoménologique de l'imagination* という題名がその明白な證據であると言はねばならぬ。現象學は一般に時空の中に現示せられる現象總體の記述的研究であるが、現在特にフッサールの現象學を意味するやうである。けれども Gaston Berger が注意してゐることく、現象學的方法と現象學體系とは區別する必要があるやうであり、前者が經驗的事實の底に潜んでゐる本質、すなはち觀念的意義を直觀によつて把握せんとするものであり、しかもその本質が個々の事例の精細で具體的な研究に即してつかまへられるところを *Wesensschau* としての新しい方法的自覺が見出されるといふことよ。 (cf. Lalande, *Vocabulaire*, 6<sup>e</sup> éd., p. 769)

サルトルの哲學は必ずしも右に區別された現象學的方法の單なる適用に盡きないものを含んでゐるが、少くともイマジナシヨンの研究においては、現象學的體系と縁が薄いといはねばならぬ。フッサールの現象學は意識の直接與件を單に記述するに止まる經驗心理學と異つて思惟主觀自體に對する反省の立場に立つことによつて事物の本質を把握せんとするものであり、方法的にはエポケーとか還元とかの操作を通じて、一般に心理學者の採用する自然的態度を一應捨てようとするものであつた。かくして經驗的心理學が經驗的意識の次元に終始するに對し、現象學は超越的意識の次元に立つものであり、前者が精々内觀的、反省法にとどまるに對し、後者は本質直觀としての反省にその特色が見出されるものと言はなければならぬ。けだし一は個々の事象を確認するにすぎないが、他は一舉にして普通者を把握するが故に。このことは、しかしながら、現象學が心理學を無用視するのでもなければ、蔑視するのでもなす。『現象學者にとつて妥當することは、また心理學者にも妥當する。實驗法や歸納法があらゆる形態における心理學の構成において果すべき本質的役割を我々はもちろん否定する積りはない。しかし實驗を行ふ前に、何に對して、自分たちは實驗をしようとしてゐるのであるか、といふことを出来るだけ正確に知るべきでなからうか。これに對して經驗の與へる教示はほんやりして、それに矛盾したものにすぎないであらう。』 (*L'imagination*, p. 141)

本質直観によつて得られた純粹形相が近代科學において果した重要な役割はフッサールによつて幾何學の物理學に對する方法的適用といふ形で指摘されてゐる。即ち物體を延長物と看做してその本質を洞察することによつて物理學は飛躍的な學的進歩をなしとげたのである。ところが物理學において指摘されたことが心理學においても妥當するのではないか。現象學的心理学は反省的直観に現れる意識の構造の本質を確定し記述するといふ意味で、經驗的心理学の方法と矛盾するものでなく、むしろその基礎學として不可欠な重要性をもつものと言はなければならぬ。

サルトルはこの現象學的心理学を想像力に適用しようとする。想像力は前にも述べたごとく再生的と創造的とに區別され、兩者はかなり質的に違つたものを有してゐるが、現象學的心理学にとつては兩者の區別は餘り必要でなく、ただその形相的本質を把握しさへすれば十分なのであらうが、他面兩者の相違をややともすれば等閑視してゐる感みがある。サルトルはイマジナシオンをば、*la grande fonction «irréalisante» de la conscience* とよんでゐる。イマーヂュを *irréel* な存在と見ることは確に事態の真相を洞察せるものであらうが、單に *irréel* なものとして措定することは却つてそのものを一種の *réel* なものと看做すことであり、そのやうな意味の *irréel* な心的要素の結合や離反の狀況を分析的に研究せんとしたのが古典的な聯合説であり、およそ心的事實を綜合と解せんとする現代心理學者たちすら有つてゐる通弊として斥けられる。何故なら、殆どの場合彼らはこの心的綜合をある種の哲學的・論理的な概念のアプリオリな分析によつて取り出された要素によつて再發見しようとするからに外ならない。綜合はアプリオリな概念によつてでなく、イマーヂュ自体への反省から綜合の概念が引き出さるべきであり、『イマーヂュはそれ自身綜合であつて要素でないものでなければ、意識の流れの中には入つて來ることが出來ない。イマーヂュは意識の中に、なすし、またあり得ない。反つてイマーヂュはある型式の意識である。それは作用であつて物ではなし。イマーヂュは何ものかにつゞいての意識である。』(『L'imagination, p. 162』)

サルトルはイマジナシオンに關するデカルト以後の諸哲學者の取扱ひ方、ならびに經驗心理學者たちの研究態度を

検討した上、根本的に二つの主要な不満を洩らしてゐる。その一つはイマーシュと感覺あるひは知覺に與へられてゐるものとの間に次元ないし質の相違を認めることなく、單に連続的な量とか程度とかの相違をもつて兩者の連結を圖らうとするが故に、イマーシュをもつばら感性的なものとして特色づけようとする企圖に對し、その二はイマーシュを與へられた一種の客觀的對象として、それらの choses がどのやうな結合ないし分離の法則に支配されてゐるかを研究せんとする所謂 *chosisme* に對してゐる。もちろんこれら二つの前提は相互に聯關してをり、choses はとにかく知覺主觀の外に在るものである以上、それらが主觀に與へられる仕方は感性的であるといふ風に考へられるのは一種の必然性をもつてゐると言はなければならぬ。

これに對してサルトルが強調したイマジナシオンとは *conscience d'image* であり *conscience imageante* であつて、一種の *inertie* と *passivité* とを含むとき要素的意識狀態ではない。彼が用ひる意識といふ術語は心的構造の單子ないし總體を意味するものでなく、具體的個性における各々の心的構造を意味するものであり、*conscience d'image* は *conscience perceptive* と同じ資格において自己の權利を主張し得るものでなければならぬ。この具體的なイマーシュの意識を把握するものが反省の立場であり、しかもそれは前に述べたがごとく内觀的反省でなくして、イマーシュ自身が與へられる仕方への反省でなければならぬ。この反省作用は 《*j'ai une image*》といふ判斷を可能ならしめる作用であり、反省的意識が我々に絶対確實なものを與へるといふことはデカルト以來周知の原則であるといふ。デカルトの直觀は原理の直接的把握である以上純粹に知的な直觀であること間違ひなく、この意味において『デカルト的(直觀の本質を構成するものは、その内容を直接に把へる知的作用であり、且つこの作用は判斷以外の何ものでもない。』と *Spaier* の主張は興味深し。(La pensée concrète, p. 264) イマーシュの意識は反省によつてその本質を全面的に開示するものであり、右の判斷はそのロゴスの展開であるといつて然るべきであらう。『反省作用は、それゆゑ、端的に確實な内容をもち、それを我々はイマーシュの *essence* と呼ぶであらう。こ

の本質はいかなる人にとつても同一であり、心理學者の第一の任務は、それを明かにし、記述し、確定化するところである。J (L'imaginaire, p. 14)

かくしてイマーシユの意識に關する現象學的研究方法は、(1)我々の中にイマーシユを生み出す、(2)これらのイマーシユについて反省する、(3)それらを記述する、即ちそれらの明確な特性を規定し分類する、といふ三つの手續きに要約され、この方法によつて得られるイマーシユの本質は確實性をもてるものとして保證される。

註 引用文の出典たるサルトルの著書の題目がきはめて紛らはしいので、以下便宜上、《L'Imagination》を(A)、《L'Imaginaire》を(B)として記すことを許されたい。

## 二

本質直観としての反省に現示せられるイマーシユの形相はいかなる特色をもつか。サルトルはこれを四つの項目にまとめらる。

(一) 例へば私が一脚の椅子を知覺するとした場合、その椅子は私の知覺の中に在るのでなくして、それは私の知覺意識の對象である。また私が眼を閉ぢて今しがた知覺した椅子のイマーシユを作つたとすると、そのイマーシユは知覺の場合にも同様であるが、意識の中へ入りこんで來るといふわけには行かない。けだし知覺されようと、想像されようと、私の坐つてゐる椅子は意識の外にあるのであり、また言葉をかへて言へば、その椅子は知覺の對象であつても想像の對象であつても同一であり、ただ意識がこの同一對象に關係する仕方が異つてゐるだけであつて、どちらの場合でも意識は具體的個別的な椅子を志向してゐるのであり、知覺の場合には椅子が意識によつて《rencontrée》されるが、想像の場合には出會ひがないだけである。出會ひといふ用語は心理學的よりもむしろ多分に存在論的であること斷るまでもなからうが、出會ひがないといふことと、對象との關係の仕方が異るといふこととは、一見撞着する

やうに見える。しかし出會ひといふのは普通實在者と實在者との會合であつて、非實在者の場合あてはまらない概念であるとするれば、イマーヂュを非實在的なものと規定するサルトルの概念においては無矛盾的であるとともに、關係の仕方として、もちろん外面的な關係でなくして *organisation synthétique* (B. p. 17) であり、*synthèse d'infériorité* (B. p. 84) であると言はなければならぬ。『イマーヂュといふ言葉は、意識と對象との關係でしかなく。言ひ換へれば、それは對象が意識に現れる一つの仕方であり、もし人が次のやうな言ひ方を好むとすれば、意識が自己に對象を興へる一つの仕方である。』(B. p. 17) したがつて *image mentale* といふ言葉は紛ひやすく、むしろ例へば自分の友人ピエールのイマーヂュといふ場合には *conscience de Pierre-en-image* とか *conscience immanente de Pierre* とかとい言ひまはしの方が適當であるわけであらう。

サルトルが右のやうなもつて廻つた表現を強調するのは、意識の本質を志向性の中に見出さうとするフッサールの思考法を尊重するからであり、意識の本質的構造を志向性と規定することは、意識に對する對象の超越性を強調するとともに、同時に對象がその本質をこの意識に對して開示することでもなければならぬ。そこに意味の領域が開いて來る可能性もあるわけである。普通、意識はもろもろの心像が群りひしめいてゐる場處のやうに考へられ、從つてイマーヂュはこの意識の中に在り、イマーヂュの對象はイマーヂュの中に在るかやうに考へられてゐるが、これは意識の志向性を洞察しなす *illusion d'immanence* (B. p. 15) であると言はねばならぬ。けだし、たとへば、知覺の對象を、知覺意識の主觀的要素に分解してしまふならば、これらの要素によつて再構成せられる對象は主觀的なものになつてしまふであらう。同様の誤謬をイマーヂュにおいてもくり返さないやうに努力を拂はうとしてゐるのがサルトルの眞意であると言はなければならぬ。したがつて『イマーヂュは、志向的構造となることによつて、意識の無生氣な内容状態から、超越的な對象と關係する一にして綜合的な意識の状態へと移行する。』(A. p. 147) イマーヂュの對象の超越性を確保することによつてイマーヂュと實在する對象との關係およびイマーヂュと純粹思惟との關

係に關する古典的な問題は問題としての根據を喪失すると彼は宣言する、けだしイマーシュは一つの意識としてその自立性が確立されるがゆゑに。しかし注意すべきことは、知覺と想像とは對象と意識との關係の仕方の違といふ表現であつて、もしその對象がいつれの場合に際しても自體的に同一であるとするれば、たとひ意識を志向性において規定しようとも對象の側面において同一といふことになり、兩者の相違は結局同じヒューレーに働きかける志向性の相違といふことに落着いてしまふであらう。意識を綜合と規定することは、單に質料を異質的形相によつて形成することになつたはずであり、綜合はあくまで内面的でなければならぬ。それにも係はず右のごとき懸念を提出するのはサルトルにこれを暗示するやうな表現があり、後述するやうにイマーシュのアナロコンが物質的なものであるほどその危険が感ぜられるがゆゑに外ならぬ。

ここで想起されるのはサルトルも引用してある Heidegger の一論文で、彼は *idea* とか *image* とかの言葉のもつてゐる多義性を指摘するとともに *meaning* 即ち *objective reference* をもたぬやうな *idea* or *image* は心理學にとつてすら存在しない、また表象と意味とは互に結合して複合的な心理全體すなはち *Psychosis* を形成し、常態では意味が知覺され、表象は背景に退いてゐるが、表象が特に注意の對象となるとき意味は背景に退く。また *psychic whole* とか *psychosis* とか言つたのも、その眞意は「何ものかを意味する」といふことは結局それが意識的作用であり、すなはち *objective reference* に内在する *self-transcension of consciousness* とよばれるものが我々によつて經驗される何ものである、といふことを表現しようとしてゐるものであると言つてゐるのは、表現こそ異なれ意識の志向性を目指してゐるものとしてよく、*imaginary idea* or *dream-picture* もよく分析してみれば、實在する對象にいつての觀念と同じく三つの側面すなはち *existence*, *content* and *meaning* をもつてゐると斷言した點にサルトル的思考のつながる深い聯關を看取することが出来る。(cf. *Image, Idea and Meaning, Mind, 1907*) もちろん後に Würzburg 學派の實驗的分析に對して大きな影響を與へた理論家フレンターノヤフツサールの考へ方と、英國で唱へ

られた「意味論派」との考へ方とは決して同一でなく、前者が表象を純粹思惟の外に排除しようとしたに對し、後者は思惟一般のもつ *la nature symbolique* を重視したと云ふ點はあらうが (cf. I. Meyerson, *Les images*; Dumas, *Nouveau traité de psychologie*, T. II. p. 574-577) 両者がサルトルの思想に深く影響を與つてゐることも見逃せなす。

(二) 第二の特色はイマーヅィエを *quasi-observation* の現象とするものであり、ここでは想像力が知覺および概念の意識と對照的に検討せられてゐる。けだし *percevoir, concevoir, imaginer* の三者は同一の對象が我々に與へられ得る三種の意識であるがゆゑに。先づ知覺作用の特色を見れば、知覺においてはそれに與へられる對象はその都度その一面であるにすぎない。たとへば一つの立方體を視るとき一度に視覺に與へられるものは精々三つの側面にすぎず、その全部を視ようとする場合には立方體の周圍に觀點の移動が行はねばならない。換言すれば、對象を知覺する場合には、對象に對して無限の可能的な觀點を設定しなければならず、觀點の無限性は對象の現象面の無限性を必然的に歸結し、それゆゑ對象は意識に對して無限に多くのものを教示すると言はねばならぬ。

これに反して概念は、さきの立方體の六つの側面と八つの角とを一度に思惟することができる。私は私の理念の中心に居り、それを一舉にとらへることが可能である。知覺と概念との違は無限性と全體性、外面性と内面性との相違と云つてよいであらう。

想像は右の兩者としかなる點において異なるか。比率的に言へばイマーヅィエはむしろ知覺の側により大きな接近度をもつであらう。(Voir, B, p. 21) けれどイマーヅィエに於いても知覺に於いても對象は *Abschattungen* と云ふ形で現示せられるが、知覺とちがつてイマーヅィエではその全體が一舉に直接的に與へられて来る。知覺においては私の注意、私の分析の新しい定位が、その對象の新しい細部を私に開示してくれるけれども、イマーヅィエではいかほどそれを長く見つめようとしても、そこに見出されるものは初めの全體性にほかならない。この全體性と不變性とは知覺

に對する表象の特色を浮き上らせるに重要な性格であるが、さればといつて概念の場合のやうに普遍性の性格をもつものではない。何故なら、見出さるべき全體性は、主觀が自分でその中に附與した成素で構成されたものに外ならず、表象の對象は人がそれについてもつてゐる意識以上のものではないが、その對象面よりみれば一種の *pauprété essentielle* (B. p. 20) をもつものとして規定される。<sup>(註)</sup>而してここから結果するものが *quasi-observation* の現象と名付けられるものである。その意味は、知覺が我々に新しい知識を得させるものとして觀察と呼ばるべきものであるならば、イマージュは對象から何ものをも學ぶことなきものとして擬態的觀察と名付けらるべきものであらう。

しかしイマージュは全體性、一擧性をもその本質構造とするゆゑ、ある意味で概念の先驅的役割を擔ふのである。「意識作用においては、表象的要素と認識的要素とが綜合作用の中で結合してゐる。したがつてこの作用の相關的對象は、感性的具體的な對象としてと同時に知識の對象として構成される。ここから歸結して來ることは、對象は我々に外から現示せられると同時に、内からも現示せられて來る、といふ逆説的結果である。」(B. p. 22) この歸結は意識の中心に位置する志向性の働きから當然演繹されて來るものではあらうが、何故イマジナシオンにおいてかかる逆説的性格が存在するのか、それはサルトル自身のもつ世界の自己超越的性格を背景に置かなくては理解され難いものであらう。

(三) 第三の特色はイマージュの意識がその對象を *néant* として措定することとして規定せられる。既述のごとく、意識を何ものかについての意識とすることは、意識に對して外的超越的な對象の存在を措定することであるが、それは逆に意識の自己超越を意味するものでもなければならぬ。もちろんこのことは一切の意識について言はるべきことであるが、とりわけ知覺的意識はその典型的なものとして諒解されやすい。しかしイマージュの意識がもし知覺的意識と同じ構造をもつて考へられ、單にその對象を志向性の違つてイマージュに變化させるとするならば、二つの意識を本性上區別することはできなくなる。イマージュの意識においてその對象は *suu generis* に意識に與へられ

るものでなければならぬ。しかしてか。知覺はその對象を *existant* として措定するに對し、イマーシユは *un néant* として措定するのである。

サルトルはこの無的措定作用を四つに區分してゐる。即ち對象を (1) *inexistant* として (2) *absent* として (3) *existant ailleurs* として (4) *existant* として措定しないこととして。この四つの形態について詳細に論じられてゐないのが遺憾であるが、(1)と(2)とが否定作用であるに對し(3)は伏陰的否定であり(4)は定立の停止ないし中性化であると規定される。けれどもイマジナシオンが *fonction irréalisante* であるとするならば、(1)と(2)とが最もこれに適合するものとして規定されねばならぬであらう。それよりも重要なことは、否定性そのものがイマーシユの中に本質的に含まれてゐることであり、この否定的措定が擬態的觀察の平面においてのみ可能であるといふことである。換言すれば、この種の否定性が感性的直觀の地盤においてのみ可能となるものであり、そこから《*intuitif-absent*》(B. p. 26)といふ言ひ廻しも生じてくるわけである。與へられる對象はいかに潑刺性、生動性をもたうとも本質的に不在的なものであり、また非現實的であるといつても、原物を模した客觀的映像でなく、數多の過去の契機が集結せしめられてゐるとともに、それらを通じて統一性が強く主張せられる志向的綜合作用によつて成立せしめられるものでなければならぬ。

(四) 第四の特色は *spontanéité* であり、この意味で、受動性を本性とする知覺的意識と對蹠的である。自發性とは『*l'Objet en image*を生み出し保存する』(B. p. 26) 謂であり、諸多の意識と同格的なものとして、イマーシユの意識はまた創造的と語られてゐる。(註1)

以上四つの規定からサルトルの語るイマーシユの大體の特性が諒解されるわけであるが、注目されるのは、イマーシユの意識の獨立性をつねに知覺および概念の意識と相關的、對照的に論じてゐる點であつて、しかも兩者の連続的中項に墮ちないために、その成立地盤を無に置いてゐることである。けれどもその無的性格は右兩者とその規定を全

く別にするわけではなく、類比的に説かるべき點が多いのであり、特に想像の根本的屬性として一見相反する面、すなはち表象性と自發性とが取り出され、前者は知覺の、後者は概念の領域において規定されるべき觀念でありながら、この相反的な性格が綜合されてゐるところに解決と課題との結び目が横たはつてゐるといふことである。

註(一) 本質的缺乏性については、同書第四部第一章「非現實的對象」において再び觸れられてゐる。(p. 171) ここでは、非現實的對象の中には嚴密な個性を構成するほど十分なものがなく、その個性の中のどの屬性も徹底的に押し進められてゐないことが、また想像から生み出される恐怖感もこの對象の性格に由来するものであると説かれ、想像作用を魔術的作用(p. 161)であるといふのである。

註(二) 『synthèse intégrée』は自發性、いや自由といつてもよいやうな極めて強い意識を随伴してゐる。即ち究極的にはひとり明確な意志のみが、意識がイマージユの平面から知覺の平面へと滑りこむのを阻止し得るのである。それにも係はらず、大抵の場合この滑りこみが起つてゐる。(B. p. 45)

しかし同書一七三頁のところでは、想像的意識をいへるものと「volonté et spontanéité prévolontaire」の言葉を用ひながら、むしろ後者の使ひ方を好むべきものとしてゐる。

### 三

L'imaginaire の第一部第二章 La famille de l'image は、第一章で規定せられたイマージユが凡そイマージユの意識としてもつ本質性を明かにせんとしたものであるとすれば、一般にイマージユといふ名稱で呼ばれてゐる一聯のものがいかなる關係において考察されるべきかを論じてゐる場處であり、ここでは先づ Portrait, Caricature, Image といふ三つの類型が取り上げられてゐる。すなはち寫眞に代表されるごく最も外的な寫像から、人の特性を故意に強調する諷刺的畫像、折にふれて無意識的に再生せらるる心理的な心像といふ三種のものが呈示せらるるが、それらのものも結局それらを通じて見出される例へばピエールといふイマージユの質料であり、《representant analogique》(B.

p. 34) にすぎないとはいはれる。三者いづれの途をとるもピエールとさう同一の對象を志向するものであり、この志向性を缺いては凡そピエールのイマーシユは成立しない。併し *matière*, *représentant*, *analogon* とさう表現は夫々獨特な性格をもつものであり、それらを通じて総合的に形成されるイマーシユへの途は *intention informatrice* (B. p. 34) を介するもので、たとひ傳統的なヒュレーとモルフューとの相關性で解釋するにしても兩者の關係は連續的でなく斷絶的でないならばならぬ。旋廻する卓子が死靈を呼び起すやうに、ヒュレーはあくまで契機となるものであるが、*a l'état libre* (B. p. 33) に存在する對象をもし受動的に解し、知覺的對象を單なる物的質料の状態において考へるならばそれは根本的に誤謬であり、かかる知覺こそ抽象的思惟の所産といはねばならない。もつとも表象の質料といふ場合、あるときは白線と黒線との交織が、あるときは *quasi-personne* が意味されてゐるやうで、その間定見の處在に困惑するが、一面實證的經驗の廣がり認めざるを得なかつたのにもよるのであらう。<sup>註三</sup>

また質料の相違によつてたとひイマーシユの本質は異ならないとするも、その質料が志向性によつて想像的綜合に形成されて行く具體的過程は同一でなく、また必ずしも簡單でないがゆゑに、サルトルは寫像ないし畫像と記號、模像、圖型、幻像、心像の各領域にわたつて夫々の特殊面を追究してゐるが、その細部については多くの問題をはらんでゐることさうまでもなす。

しかしながら、それらの種々のイマーシユにおいても根柢にある志向性はなら變化せず、また内容的には一種の *savoir* であると解説せられてゐる。即ち右のいづれの場合をとつても『ある種の質料を生命づけて、それをば不在的もしくは非存在的な對象の *représentation* とすることが問題であつたのであり、質料が表現すべき對象の完全な *l'analogue* であつたことは決してなかつた。ある種の *savoir* がその質料を解釋し、その空隙を充填するにいたつたのである。一つの場合から他の場合へと發展して行つたのは、*matière* と *savoir* とさう相關的要素に外ならぬ』(B. p. 71-72) マナゴンは想像的意識の系列を下降するにつれて知覺像と接近し、知覺と想像との相違は單に質料

の意味の有無にすぎないが、系列が上昇するにつれアナログンのもつ價值は低減し、質料のもつ本質的貧窮性が明白になつて来る。逆にそれは質料を通じて志向せられた對象がより多くの一般性を獲得して來るといはれるわけである。その極イメージは概念ないし概念の領域に近接するであらう。dessin schematique (B. p. 73) がまさにその位置を占めるものであると言つたのは、リボーが image schematique について述べたことを想起せしめる。かくして『想像的意識の質料と知覺の質料との距離が大なるほど』、即ち知覺の質料に savoir が貫通して來るほど、それと想像の對象との類似性は弱まつて來る。(12, p. 73) savoir の働きの重要性を増すにしたがつて精神の働きは自由になり、自發性が増して來る。アナログアの代りに equivalence (ibid.) の現象が指摘されてゐるのも十分理解できるわけである。けれどもここに強調される savoir がもし全くの純粹知であるならばそれは、結局想像力を、知覺と概念との混成で理解することになり、想像力の獨自性を主張することが不可能になるであらう。知覺と想像力との間に所屬を異にする世界の相反性、すなは逆比的關係を説く以上 (B. p. 62) 純粹知と想像知との間にも單なる程度の差で割り切れない異質性が認められねばならぬであらう。關係知としての純粹知に對し、象徴知としての想像知が論ぜられねばならなかつたのも當然の歸結であると言はなければならぬ。

サルトルは最後に image mentale について論じ、ここでは心的興件がやはりアナログンとしての機能をもつてゐることを認めながらも、この興件について、その本性ならびに合成要素について、より明確な規定を加へんとする場合には、それが直接に知覺の對象となり得ない故に、推測の領域に踏みこまざるを得ず、ここにおいて現象學的記述の確實な地盤を去つて、實驗的心理學の蓋然的領域に移らねばならぬと結論し、第一部「確實なもの」から、第二部「蓋然的なもの」へと立場を轉移させてゐる。

第二部は心像におけるアナログンの本性について述べられてゐるわけであるが、さし當り問題になつて來るのは前記に幾度か觸れた savoir の特性であらう。およそ想像的意識の中心契機が intention に置かれ、それが根源において

我々の自發性にもとづくすれば、この中には何らかの *savoir* が含まれてゐなければならぬとされる。前章の終りの方で私は想像力に含まれる相反的概念について注意しておいたが、それはすべての面について指摘されるべきことであり、「純粹志向性」(13, p. 79) も何ものかへの志向性であるとともに、それは志向的對象についての認識をも含むものでなければならぬ。たとへばイマージュとしてのビエールは金髪で、背が高く、鼻は先が反つてゐるとかいふやうに。外的志向性と内的認知性とは同一の想像作用の相反的構成契機であり、しかも認知は認識でなくして、しかしかに表象したうと云ふ要請であるがゆゑに直観において實現されるべきものとされる。

*savoir* (das Wissen) と云ふ言葉は Würzburg 學派で注目され使用されたものであり、元來 *idéation* の働きのあけるイマージュの重要性を漸次減少せんとした努力から生まれたものに外ならぬ。即ち Mayer, Orth, Marbe などは聯合作用、判斷作用などの研究を通じて *attitudes de conscience* (Bewusstseinslagen) と云ふ名稱で一括される諸現象に注目したが、*Külpe* も抽象作用の研究を通じて *thème* (Aufgabe) の役割を重要視してゐる。キェルペの弟子 Watt, Messer, Bühler 等も同種の研究を徹底せしめてゐるのであるが、彼らが思惟作用の分析を介して發見したのは、それはゆる言表に困難を感じる一聯の意識状態であり、それらの中には記憶や方向感情、意義、思念、作用、その他の限定困難なものがふくまれてゐる。もちろん各研究者にしたがつて方法なり研究成果なりの間にはかなりの開きが見られるが、大體の共通點としては純粹思惟の原始性、獨自性を確保せんとしたものと云ふ、この學派では純粹志向性を内容なき純粹意義、對象に對する純粹な定向と解するやうである。

サルトルもヴェルuppルグ派の研究に頼つてゐたことは再三にわたるそれへの顧慮によつても分るが、立場の相違は使用概念の同一性にも係はらず、その内容の根本的な變容によつても窺知せられる。その一つが既述の純粹志向性の概念にも明白に看取できる。<sup>註</sup> また右に述べた *Bewusstseinslagen* のほか *Bewusstheit*, *Sphärenbewusstsein* などと呼ばれたものを證據にして、彼の想像的綜合の存在を正當づけようとしてゐる。即ち想像力の中に契機となつて

の *savoir* は *savoir dégradé* (B. p. 82) と呼ばれるべきで、根源的に感性的なものと内密な關係を結んでゐるものであり、それは「幾分かは視覚的ならし概念的ではあるが、併し視覚的印象を生ずるがごとき性質をもつたもの」(B. p. 82) である。ゴッラーの *Schöner* 的な *Bewusstheit* とは縁薄きもの、一見ベルグソンの *scheme dynamique* に似通つてゐるかのとききものとされる。

ベルグソンのイマジネ論がサルトルに大きな刺戟と反省を與へてゐることは *L'imagination* の中でベルグソン批評に費されてゐる頁数の多きによつても推測せられるわけであるが、今筆者によつて最も興味深いのは *scheme moteur* に對する批判である。詳述するまでもなくベルグソンは「物質と記憶」の中で、二種類の記憶を區別し、「一を純粹記憶または獨立的記憶とし他を身體的記憶、または運動機構としてゐる。後者は *repetér* する記憶であり、前者は *imaginer* する記憶である。反復される記憶は習得される記憶であり、それは常に動作と結びつたものであるに對し、想像する記憶は記憶心像の形式において日常生活のあらゆる出來事をそれが展開されるがままに記録するもの、本來過去の性格をもつといつてよい。もちろん常態的現實意識は現在の知覺と結合して、それと有益な統一を形づくる過去の心像のみを保存して他のすべてのものを排除する傾向をもつてゐる。ただしこれら二種類の記憶は純粹な状態で存在せず、實際には兩者が原本的な純粹さの幾分かを捨てて互に相手の中へ入りこみ、遂に融合してしまふがゆゑに。

ベルグソンはこの自己の假説を言語の再認及び感覺的失語症の研究によつて立證せんとした。ところで注目されるのは再認に受動的なものと能動的なものとの二種類を區別し、前者は習慣によつて身體の中に構成される *appareils moteurs* によつて行はれるに對し、後者は純粹記憶の中に *souvenirs plus* を探しもとめ、それらを現在の知覺と接合せしめることによつて漸次具體化して行くやうな、意識の多かれ少なかれ強度な緊張によつて可能なのである。(cf. *MM*, 50<sup>e</sup> ed., p. 267-268) 外國語や體操の習得過程を例證として、その形成を示唆してゐる運動圖式は上述の

二型式に照して考へるとき、第一種のものに對應してゐるが、一九〇二年に發表された「知的努力」において明白に説かれてゐる *schéme dynamique* はむしろ第二種のもつと看做してよいであらう。

サルトルのベルグソン批評は一應異質的に取り扱はれるイマーシユそのものについて全面的に展開されてゐるが、その一つとして(空間的)形像がどうして記憶心像に變化するかを追求し、形像は要するに身體によつて切り離される *une chose* にすぎず、この截離が形像に對して表象され、とゞ新しき性質を賦與するのである。しかし身體の活動が中止するときでも、形像が切り離されたままに留まり、且つ表象といふ性質を保持してゐるのはどうして可能であらうか。また *image-representation* は観念的には切りはなされながら、現實的には他のすべての形像と結合してゐる。ところがそれは *image-souvenir* となることによつてその觀念的截離が現實的截離となり、世界から浮き上つて精神に變形してしまふ。その外『記憶の形式は知覺の形式より決して遅れるものでなく同時的である。知覺が作られて行くに應じてその記憶もその側に映寫されて行く。』(Le souvenir du présent) といふベルグソンの言葉を擧げつつ彼のイマーシユは結局經驗論的な原子論的思想と大差なきものと断定し、知覺と記憶との間に質の相違を求めようとする企ては要するに新しい問題を提起するにすぎず、主觀的側面では *action* と *souvenir* 客觀的側面では *image-chose* と *image-souvenir* との解けざる對立を措定してゐるだけであるときめつけねば。

形像から心像への途が困難であると同じく記憶から知覺への途も障碍多きものであり、この途はベルグソンに於いて一方では心理學他方では形而上學に根差す矛盾的な二つの理論によつて展開され、第一の理論によれば記憶を現實化するものが身體であるに對し、第二の理論によれば知覺をば運動圖式に、意識的表象に成すものは記憶である。しかばこの相反する理論は如何にして正しく調和せしめられるであらうか。しかも『現在の運動圖式の中に具體化せられる過去の断片としての記憶心像と、過去の記憶がそこで具體化される現在の運動圖式としての知覺との間に實際的な相違が見出されぬことを、人は一再ならず看取するのである。』(A. p. 57)

確にサルトルが指摘したごとく、ベルグソンの運動圖式を記憶の面から見るか、知覺の面から見るかは大きな問題に違ひない。しかし嚮にも述べたごとく運動圖式が身體機構との關聯のもとに考へられる限り、問題領域を意味の方に展開させ、單一とは云へないまでも少なくとも集結せしめられた圖式、しかも數多の寫像に展開され得べき原本的表象として *schéme dynamique* が述べられて來たことは知性や知解作用との關聯性もあり、新しい視野の展望を可能にするものである。動的圖式は意識の一面面から他の平面へと上下運動をなす精神の働きを可能にするものであり、抽象者から具體者へと下降する方向に構想力との類似が、イマージュから圖式へと上昇する方向に記憶との類似が見られるが、圖式自體は動的であり生成的である。(L'énergie spirituelle, p. 199)

サルトルが取り上げたのは圖式から心像へと表象を具體化して行くこの *intellection* が、自己の主張するイマージュの本質構造としての *savoir* とどのやうに相違してゐるかを對決せしめんがためであり、ベルグソンに對する根本的不滿はベルグソンの解したイマージュが究極において靜的原子論的であり、動的圖式といへども綜合作用なき單なる *synthèses mélodiques* にすぎならざるところにある。

*savoir* は、サルトルにおいて、想像的意識の能動的構造を表すものであり、イマージュの形成によつて背後に消滅してしまふやうな圖式でない。圖式はイマージュと截離されるものでなく、イマージュ自身が圖式であり、それ自身が意味を擔ふものでなければならぬ。それは *Flach* が名付けた *schémes symboliques* (*symbolische Schemata*) に類するものであると言はれるのもこの意味で十分諒解されよう。サルトルによつて引用されたフラッハの言葉によれば『私がある問題の興件を明らかにしたいと思ふとき、または私の思惟に對して一定の有用性を示す命題を理解しようとする際に、多かれ少なかれ生き生きした表象、しかもその問題の解決、その文章の理解をいつも隨伴してゐるやうな表象が生まれて來るのを、私は時に氣付いたのである。』(B. p. 128-129) 即ちここに現れて來る表象は、いはゆる理解作用と共に現象するものであり、問題または命題の單なる記憶に隨伴するのでもなければ、さりとて意

志によつて生み出されるのでない。前者の場合には *une réaction verbo-notrice* 後者の場合には *simples illustrations* が生ずるのみであり、いはば兩者の中間的形態たる *compréhension* では、本來的な意味でなく *signification symbolique* が把握されるとする。象徴的圖式はかかる象徴的意義をもつものとして特徴づけられる。

ところがサルトルによればフラツへの最大の缺陷は、この圖式を *Sphaerenbewusstsein* の創作と考へる點にあり、事實は之に反して想像的意識が本質的に象徴的であるといふところにある。象徴といふ概念は普通、象徴とその背後に在る事物との間に完全な異質性を認めることによつて成り立つ。イマーシュについて言へば、それは純粹思惟の *illustration* になることを意味する。併しそのことは結局イマーシュの自立性を捨てることになるがゆゑに、サルトルは *compréhension pure* と範疇を異にする *compréhension imagée* (B. p. 132) を提出せざるを得なかつたわけであらう。しかしこれら二つの理解型が對象によつて支配されるものでなく、この對象に對する意識の *position* によつて制約されるものである以上、意識のいかなる志向的態度に對して理解は想像的形態をとり、この態度と象徴的圖式との間にどのやうな函數關係が存在するかが問はねばならず、これに對する答辯は、イマーシュの中には人がそこへ指定するもの以外の何ものも見出されない、といふ第一部の根本定則を據り處にして行はれてゐる。

象徴をめぐる展開される新しい問題については稿を改めて精細に取り扱はねばならないが、唯目下筆者の痛感する點は、通常心理學ないし哲學で論ぜられる過程とサルトルの論法とが多くの點で類似し、用語も同一でありながら相互並置してその優劣長短を直ちに判定し得ないと思はれる節で、その理由は前にも述べた如く、サルトルの心理學の背後に質存論的な世界觀が横たはつてゐること、普通の心理學ないし哲學がいはば外から内への方向に在る認識の立場から考へようとするがゆゑに、内から外へをその本性的在り方とする構想力を正面から考へようとする行き方と矛盾するのでないかと思はれる。もちろん今しがた述べて來た象徴的圖式の問題でも *schéme* と *symbole* との異同を充分検討した上で *schéme symbolique* について論ぜらるべきでこの方面に關するサルトルの論理の粗策さは

責めらるべきであらう。

註(一) 同様の使ひ方は *le savoir de l'état libre* (B. p. 80) とさふ表現でも見られ、想像的意識の志向作用を蒙らない場合に用ひられてゐる。

(二) 知覚については隨所に言及されてゐるが、第三部「心的生活におけるイマーシユの役割」の第四章で一應まとめて説かれ、知覚とは時空的對象に自己を現前せしめる作用であり、こゝでも *intentional vides* が働いてゐることを認めてゐる。また知覚の中には無限なるイマーシユの發端があるが、イマーシユは本來知覚の否定であつて成り立つと言つてゐる。

(三) Bühler は意識の三つの型を挙げ、第一のものは問題解決をはかる方法獲得の意識であり、第二は描かれる思维の内部に樹てられる内的關係の觀念、第三の志向性は内容なき純粹意味、對象に向ふ純粹方向であり、ピユラーははつきり言つてゐないが、これら三つの意識は同一平面上に置かるべきものでなく、志向作用が純粹意味の替であるに對し、前二者はこの枠を満たすべき諸規定、フツサールのいふやうな範疇直觀とされる。(1. Meyerson, op. cit., p. 568-570) とさふがサルトルはこの志向作用といふ用語を極めて不適當なものとし、この純粹志向性とさふ *conscience vide* がイマーシユの充填によつて *conscience pleine* になると考へるのは内在論的誤謬であるとさふ。(B. p. 80-81)

#### 四

サルトルの現象學的心理學の背後に、質存論的哲學が存在することを私は前に指摘しておいたが、いま本論の終りに際してイマーシユの存在に關する哲學的思索について簡単に觸れておかねばならない。それは、およそ意識が想像し得るといふ事實から、いかなる性格が意識に賦與さるべきかの問題となつて現れて來る。もちろんこの問題もその最も深い意味は現象學的な觀點よりしかとらへられないとせられるが、その意味は『現象學的還元がなされて後、我々の反省的記述に開示せられる超越的意識に面前する』(B. p. 227) とさふことであり、我々はこのやうにして意識の本質についての形相的直觀の結果を概念によつて確定することができる。而して現象學的記述によつて開示され得

る點は、超越的意識の構造自體に、この意識が一つの世界によつて構成されてゐることが含まれてゐる、といふことにほかならない。いふまでもなく、それは實有的現實界でなく、非現實的超越界であり、超越は否定的超越としてつねに超越的意識の地平において可能である。いかにしてか。

例へば今ベルリンに居る友人ピエールのイマーシュを作つた場合、たとひピエールは現在ベルリンに實在してゐるうとも、彼がイマーシュとして私に現象するときには、彼は *absent* なものとして現れてゐるのであり、この對象のもつてゐる本質的な虚無性、對象の實有性を本性とする知覚と根本的に違つてゐるわけである。もちろん知覚にも「空虚な志向性」*être visé a vide* が存在する。併しそれは各瞬間に知覚に現れる對象の姿が一面的であるといふにすぎず、*être domé-absent* とつてのイマーシュの本質的規定と質的に相違する。イマーシュには自體的な否定作用とか不在性とかが、その内的構成契機として含まれてゐるのである。

否定性、不在性は一種の無性であるがもし有性を一般に現在の特性とすれば、過去および未來に基盤をもつといふ意味でやはり無性をもつといふべき二つのもの、即ち *mémoire*, *anticipation* と *imagination* との對比ないし關係が課題として提供される。前二者は慥に後者と極めて親密な間柄に立つてゐるが、根本的に異なるものとして規定されるを得ない。何故であるか。例へば昨夜ピエールが私を殴つたとした場合、この殴打事件は私の記憶に保存せられてゐる。しかしこの事件を私は現在想起してゐるのであつて想像してゐるのではない。それは *domé-absent* でなくして *domé-présent au passé* であり、この事件は過去の事になることによつて非實在化したのでなく、ただ退けられたにすぎず、その意味で依然として實在的であり、單に過去の事になつた過去であるに留まる。したがつて、しかしかの記憶を想ひ出すといふことは、それを *évoquer* することではなく、それが存在する過去へ私の意識を向けるだけである。

同様に未來を豫期によつて先取することも、未來を想像することとは異なる。未來には二つの種類が區別せられる、

L'avenir vécu と L'avenir imaginé と。サルトルはこの區別を巧な比喻で表現してゐる。例へば私がテニスをしてゐるとき、相手がラケットで球を打つてのを見て、私がネット際に躍り出すとする。ここには豫期が存在してゐる。即ち私は跳ね返つて来る球の軌道を豫見してゐるのである。もちろんさう豫期したからとて球がしかじかの點に必ず飛んで來るとは限らないが、テニスの相手が構へてゐる身振りがその球の軌道を豫見させるのであり、相手の現實に取つてゐる身振りが凡べての形に彼の實在性を傳へてゐるのである。だから、かう言つてもよす。 *reel-passe* と *reel-futur* との地平を隨伴せる現實的形態が彼の身振りを通じて全面的に實現されてゐるのであると。私の豫見するものがまだ現實でないと言つたところで、この未來は單に連續的に現在化されるまでであつて決して非現實ではない。

反之、私が寢床に寝ころびながら友人ピエールがベルリンからパリへ歸つて來たらどんなことが起るだらうかしらと豫想をめぐらしてゐる場合には、未來を現在から切りはなして考へてゐるわけであり、ここでは未來はまだ無いもの、しかも不在的なものとして、もつと言葉を強めれば *neant* として措定してゐるわけである。かうして私は同じ未來を一方においては現在の根底として生きることが出來るとともに、他方においてそれを引きはなし、それ自體として措定する。即ち一切の現實性から切りとり、虚無化し、無として現勢化するわけである。

かうして我々は意識が *imager* なし *imaginer* する (サルトルの用法では兩者とも殆ど同意義に用ゐられてゐる) ための本質的制約を無あるひは否定性としてとらへることが出來るわけであるが、併し意識は前述の如く、何ものかについての意識であり、否定は何ものかの否定でなければならぬ。しかも想像的意識の志向するものが非現實的な存在であるがために、右の兩命題は矛盾なく語られるわけである。けだしイマージュを不在性、非現實性をもつたものとして措定することは、イマージュを現實の否定態、或ひはその否定的超越態として措定することではなければならない。現實の否定は現實の否定的超越であり、しかも現實を越えるといふことは、現實の全體を越えることではなければならない。イマージュを措定することは、現實から距離を保つこと、それから脱却すること、現實を否定する

ことである。しかるに否定さるべき現實は、現實の全體であり、且つそれは「意識によつて、この意識に對する une situation synthétique」として把へられる限り *le monde* にほかならぬ。(B. p. 233) それゆゑイマーシュは現實から見れば非現實でありながら、イマーシュの構成面より見れば、逆に世界が無として規定せられることになる。したがつて、凡そ *imaginaire* なものの創造は、その本性が「世界に埋没して在る」*être-au-milieu-du-monde* やうな意識によつては不可能である。けだしイマーシュを得るためには、意識は世界を脱離しなければならず、しかもかく脱離し得る意識は「世界に於て在る」*être-dans-le-monde* 存在しなければならぬ。世界を否定し得る存在は一言で云へば、自由なる存在であり、かくして非現實性と否定性とはやがて實存主義の根本命題たる自由の問題と連結して来る。サルトルは「無とは實存者の構成的構造である」といふハイデッガーのテーゼを支持しようとする。

ところが「世界に於いてある存在」としての意識に本質的に含まれてゐるこの否定的超越作用は、決していはゆる身勝手な仕方ではなされる超越ではない。自由は恣意ではない。世界の否定は單に全面的な世界の否定ではなく、常にある觀點よりの世界の否定でなければならぬ。即ちイマーシュとして呈示し得るある對象の非現實性、不在性を許すやうな否定でなければならぬ。例へば友人ピエールが不在性をもつものとして私に與へられるためには、世界そのものが、ピエールが現實には實在せず、しかも私には現示せられてゐるやうな全體として把へられねばならぬ。併しながら、非現實的なものの出現を動機づけるものは、特定の觀點より眺められた表象的直観ではなく、むしろ *affectibilité ou action* によること。(B. p. 235) 例へば死んだ友人のイマーシュが現れるのは、この友人といふ觀點からは空虚な世界として眺められるやうな、現實に對する感情的把握の地盤においてなされるのである。イマーシュに感情が構成契機となつてゐることは第二部第二章を見ても肯けるわけであり、この方面でもまだ論ぜらるべき點は多いと言はなければならぬ。

サルトルは現實を世界として諒解するやうな種々の直接的様態を *situation* と呼んでゐる。従つて意識が想像し得

るためには、意識が「世界に於ける状況の中に」ある、もつと簡単に言へば意識が世界内存在であることが必要となつて来る。何らかの非現實的な對象が構成されるための動機づけとなるものは、意識の具體的で個別的な現實として把握される「世界内状況」*la situation dans le monde* (B. p. 235)なのである。

かくして我々はかう要約し得ると考へる。非現實的存在の措定としてのイマジナシオンは自由なる意識の働きであり、自由なる意識はイマジニユを介して世界を脱離し、世界を否定することが出来る。しかしこの自由は、自由のノエマ的相關者である「世界」が、自己の中にいつもイマジニユによつて否定されるといふ可能性を含んでゐるがゆゑに、しか自由であることができるのであり、また逆に、イマジニユはこの世界を根底にすることなくしては決して出現することができないのである。世界の否定性が自由の根本制約であるとともに、自由の可能根據が又この世界における存在であるところに、自由と世界との深い相反的結合性が見られるといつてよい。このやうにして非現實的なものの生産によつて、意識は瞬間的に世界内存在から解放されるやうに見えるが、實はこの「世界に於いて在ること」こそがイマジナシオンの必然的制約に外ならないのである。イマジナシオンはこの意味において、自己の自由を實現する限りの意識一般であり、この世界における意識のいかなる具體的・現實的状況も、それが常に現實的なものの超越として示されるかぎり *imaginaire* なものに満ち溢れてゐるといつてよい。また逆に *imaginaire* なものは、質存者がそれに向つて超越して行く具體的な「何ものか」であると言つてもよゝであらう。人間が *imaginer* し得るのは、彼が超越的に自由であるがゆゑに外ならない。

周知のごとくサルトルの哲學は自由の哲學であり、彼の主要な實踐領域は文學であるといへる。自由は意識の本質的規定であり、イマジナシオンに表現せられる自由の働きは、世界の否定でありながら、實はこの否定が世界内状況に規定せられるものであり、その意味で世界に深く繋るものであつた。藝術はこのイマジナシオンの中樞的な所産であるが、イマジナシオンそのものが自己意識の根本構造に淵源するものであることによつて、藝術は單なる技術でも

なければ、戯作でもなく、却つて人間存在そのものの本質に根差すものである以上、サルトルにとつて本質的な在り方であり、この意味においてサルトルの實存哲學は少なくともその本質的な一面において多分に藝術的であると言ふべきであらう。

サルトルのイマジナシオンについては語るべき多くのものが存し、問はるべき點も無數にあらう。しかし私としては成るべくサルトルの強調しようとした中樞線を通りつつその本質を明らかにし、また彼の實存哲學とどのやうな聯關をもつかを大體明らかにし得たと思ふ。

(丁)

—一九五二・一〇・二八—

(筆者 大阪市立大學法文學部「哲學」助教授)

---

---

# ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article*

## On Sartre's Imagination

*By* Yoshihiko Nishimura

This paper aims at explicating the fundamental ideas that M. Sartre describes in his two books, *L'imagination* and *L'imaginaire*.

In fact, since Descartes, many philosophers and psychologists have consecrated their studies to the problem of image. Also in the nineteenth century France, after the psychology of synthesis introduced by Ribot, Bergson established—for the first time in history—metaphysics of image.

The phenomenological psychology of imagination has been formed in a sense by developing and criticizing these preceding studies; the present writer most highly appreciates the method of Husserl to determine the properties of image.

The image is, according to Sartre, a consciousness which is given immediately to the reflection. Only the act of reflection gives us what he calls the essence of the image. Furthermore, as the imagination is a great function of consciousness to create a world of unrealities, the dominant characteristic of the image lies in the negation of the actual existence of objects. Therefore, the present writer made an effort chiefly to clarify the meaning of this negative positional act of the imaginative consciousness.